

# 高知大学 病院ニュース

〔編集〕  
 高知大学病院ニュース  
 編集委員会  
 委員長 大西 三朗  
 〔発行人〕  
 高知大学医学部附属病院  
 病院長 倉本 秋

## 新年度を迎えて

病院長 倉本 秋

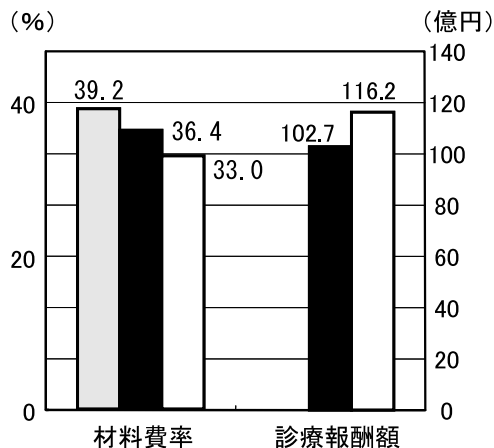
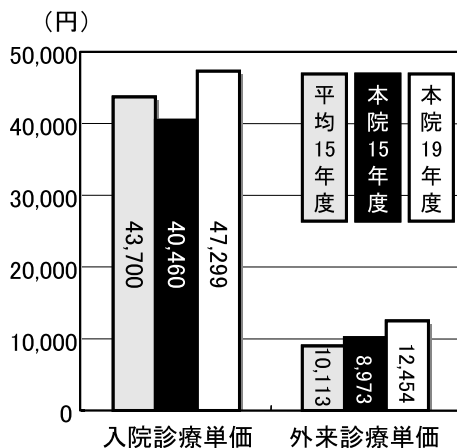
6年間に亘る第1期中期計画の5年目が始まります。1年間というより、第1期中期計画を仕上げ、第2期中期計画を立案する2年間と捉える方が良いでしょう。この2年間、継続して病院長職を担当させていただくことになりました。どうか引き続いてよろしくお祈いします。

あなたの廻り、4年間で働きやすくなりましたか。楽しい職場になりましたか。同僚の顔は輝いていますか。患者さんの表情はどうでしょう。同じ医療、看護を提供するなら、楽しく働き、患者さんには驚きを感じて欲しいものです。「こうすればもっと良くなる」投書箱で、メールで、あるいは直接、もっともっと教えてください。みなさんの感性が病院をスマートにする原動力です。

PCに眠っているファイルから16年5月の職員説明会に使ったパワーポイントを見つけました。私たちの病院の現状と、他の国立大学病院と比較した位置をお示しした時のものです。その中からわかりやすい数字を抜き出して、図にしてみました。左端、網かけの平均15年度は当時の国立大学病院の平均を示しています。この4年間で入院診療単価、外来診療単価とも大きく伸ばしています。患者さんからの信頼、職員の思い、手術件数の増加、そしてPETなど大型検査機

器による増収などの積み重ねです。この間平均在院日数も21.7日から19.5日まで下げましたが、稼働率は83.5%（15年度82.8%）と下がっていません。もともと全国平均を下回る良い数字となっていた材料比率は、手術件数の増加にも拘わらず、33%とさらに下がりました。そして4年間の診療報酬の伸び13.1%は全国でもトップレベルです。このようなみなさんの頑張りが病院機能の向上、診療機器の更新、福利厚生に結びつく良い循環を生みだしてくれました。

さてこれからです。地域の病院として、①高齢者の「機能」を大切にすること、「少子」の子供たちの体とところを大切にすること、②自殺、糖尿病、脳卒中などどれをとっても全国上位にくる高知県で本当の予防医学を実現すること、③がんの治療成績やさまざまなquality indicatorを公表して、より信頼される病院になること、④治験や外部資金の導入をこれまで以上に推進すること、⑤PETやFUSなど特色の出せる医療を健全に経営することなどを心がけて、体力を蓄えたいと思います。21年には病院機能評価が、そしておそらく平成23年には病院の再開発が待っています。これまで病院再開発を行った大学病院は間違いなく赤字に転落しています。黒字のまま再開発を行う病院を目指しましょう。



## 医学部長就任に当たって

脇口 宏



平成20年4月から医学部長を拝命しました、小児思春期医学講座の脇口です。

高知大学の教員組織改革に伴い、教員の所属が変わりました。全ての教員は教育研究部に所属し、医学部の教員は医療学系医学部門

に所属します。近い将来、医学部門は3部門に分けられますが、現在の私たちの正式な所属名は、「高知大学教育研究部医療学系医学部門」になります。医学部は医学科と看護学科、大学院は修士課程が医科学専攻と看護学専攻、博士課程が医学系専攻で、生命科学コースと医療学コースとに分けられます。教育研究部から医学部に出かけて学部生の教育を、大学院に出かけて大学院生の教育を行います。

医学部教員の主な業務が教育、研究、診療の3本柱にあることは普遍的であると考えます。どれが欠けても医学部の存在価値はなくなりますが、社会の変化と共に大学に求められるものも変化しております。学部教育、大学院教育の重要性が増大し、「教育が大学教員の最も重要な本分」と考えられるようになってきていると考えます。現在、ぎりぎりのところで頑張っている高知大学は、これからも光り輝く個性を発揮しなければ、中央から認められることはないでしょう。高知大学の地域貢献度は全国立大学中8位ですが、教育・研究に対する評価は極めて低いことが問題です。研究はもちろん重要ですが、高知大学医学部は、「地域連携と優れた学部教育、大学院教育、専門医教育、生涯教育を通して県民の健康推進」を達成することが重要と考えます。研究で旧帝大に肩を並べることは不可能ですが、教育内容でトップレベルになることは可能です。教育だけをしていれば良いという訳ではありませんが、私が危惧しているのは、教育は教員のサービスという意識を持っている先生が少なからずいらっしゃる事です。若い助教の先生方の中には、教育どころではないという気持ちが

あるのも理解できます。しかし、充実した教育と学生諸君に対する教員個々の溢れる情熱が学生に伝わらなければ、大学で研修し、大学で研究する若い医師は育たないでしょう。今こそ教員各位の意識改革が必要な時ではないでしょうか。

高く評価される教育内容を実践するためには、教育を正當に評価するシステムが必要だと考えます。そのためには、新たに公募されている「医学教育学講座教授」の力が期待されることです。国家試験合格率100%を目指し、学生や研修医が母校で頑張りたいくなるような教育を達成しなければなりません。医学部附属病院との連携は大変重要で、臨床系大学院(医療学コース)におけるリサーチマインド豊かな専門医の育成には病院全体の優れた診療力が必須です。看護師もこれからはリサーチマインドが求められます。新カリキュラムは人間味あふれる良医、優れた看護師の育成をさらに推進出来る内容になったと確信しております。

研究がなければ大学の魅力と存在価値はなくなります。生命科学部門には基礎医学研究の推進と研究者の育成を期待しております。基礎と臨床の連携を強め、研究でも光り輝くために、高知だからこそ出来る多くの研究が必要です。外部資金の獲得、国内外との交流、共同研究、留学を支援します。とくに、学部横断的、講座横断的な共同研究、高知大学医学部独自の特色ある研究が続出することを期待しております。

地域貢献は高知大学医学部にとって最重要課題の1つです。これまで以上に、小蓮地区、南国市などとの協力体制を強固にし、地域に根ざした医学部を確立するつもりです。医学科、看護学科が附属病院と協力し、お互いの機能をさらに高め、地域医療、健康啓発、医療人の生涯教育に貢献できるよう尽力するつもりです。

これからの2年間、高知大学医学部が光り輝き続け、若い人たちにとってこれまで以上に夢のある職場になり、県民の期待に応える医学部になるように、全力を尽くしたいと考えておりますので、教職員の皆さんのお力添えをよろしくお願いします。

# 『DMATの活動について』

集中治療部 阿部 秀宏

## DMATって？

みなさんは“DMAT”という言葉をご存じでしょうか？はじめて耳にする方も多いのではないかと思います。

DMATとはDisaster Medical Assistance Teamの略称で“災害医療支援チーム”のことです。厚生労働省の管轄下にある組織で、日本DMAT隊員養成研修を修了してDMAT登録者になると日本DMAT活動要領に基づいて災害時に活動することになります。

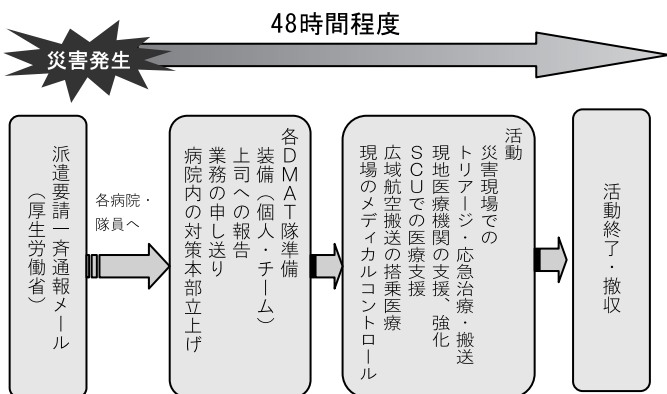
## 阪神淡路大震災を契機として

DMATが組織された背景として平成7年に起こった阪神淡路大震災があります。この時多くの傷病者が発生し医療の需要が拡大する一方で病院も被災し、ライフラインの途絶、医療従事者確保の困難などにより被災地内で十分な医療を受けられずに死亡した「避けられた災害死」が大きな問題として取り上げられました。このような災害に対して専門的な訓練を受けた医療チームを可及的速やかに被災地に送り込み、現場での緊急治療や病院支援、さらには被災地外への広域搬送を行うことでより多くの災害傷病者の救命が可能になるとの考えに端を発しています。

## 活動状況

平成17年夏の発足以来、現在では全国で200チーム以上のDMATが登録されており、すでに新潟県中越地震や能登半島地震の際には被災地に赴き、災害医療活動を行っています。高知県においても本院（平成20年4月時点で2チーム、9名）をはじめ高知医療センター、高知赤十字病院、近森病院、幡多けんみん病院ですでにDMATチームの登録が完了しています。

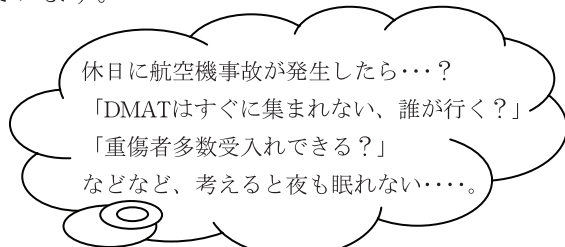
## DMATの出動



## 急がれる院内の体制づくり

高知県では昨年の高知龍馬空港でのボンバルディア機の緊急着陸を契機として、大規模事故・災害に対する県の防災マニュアルが急ピッチで改定されており、その中にこのDMATが正式に組み込まれることとなります。したがって、連絡があればいつでも出動できるように、あるいは多数の重傷者の受け入れが出来るように、病院をあげての体制の整備や装備の充実が急務と思われれます。DMATの活動として、現状では出動要請時の連絡体制および院内災害対策本部の設置等の具体的なマニュアル作成、必要な医療資器材等の整備を進めています。また今後の活動として定期的な災害訓練の企画・参加（四国4県合同訓練、院内の災害訓練など）、院内における災害医療の啓発に邁進し、災害時には多くの職員の方々にも協力していただける体制づくりに努めていきたいと考えています。

DMATはまだ歴史も浅くこれからいろいろな意味で体制の強化・改善が必要と思われれます。まずは院内でDMATチームを増やし、訓練を定期的に行い、数・質ともに向上していければと切に願っています。



■附属病院 医局長・外来医長・病棟医長一覧

平成20年4月1日

Table with 4 columns: 診療科名, 医局長, 外来医長, 病棟医長. Lists medical staff across various departments like Internal Medicine, Pediatrics, etc.

■平成20年度病院ニュース編集委員会委員名簿(任期:平成20年4月1日~平成21年3月31日)

- 委員長 大西三朗(内科科長) 委員 渡部輝明(医学情報センター 助教)
副委員長 清水恵司(脳神経外科科長) 委員 岡林安代(看護部 副部長)
委員 窪田哲也(内科 講師) 委員 西田浩敏(総務管理課 課長補佐)
委員 植田栄作(歯科口腔外科 講師) 委員 都築泰仁(医療サービス課 課長補佐)

診療状況

Table showing patient statistics for Jan and Feb, including '外来' (Outpatient) and '入院' (Inpatient) counts and '稼働率' (Operational Rate).

Table showing '院外処方せん発行率' (Outpatient Prescription Issuance Rate) and '紹介率' (Referral Rate) for Jan and Feb.

編集後記

新年度の始まりと言えばやはり桜でしょう。
今年の桜は時機を知り、年度の交替を飾るが如くの盛りを見せてくれました。
さて、「十年一昔」という言葉がありますが、昨今の世の変化は一年が十年にも匹敵するのでは、と感じるのは私だけでしょうか。
この一年間の「病院ニュース」のタイトルをいくつか並べてみます。
・病院改修(コンビニ・スターバックス)
・看護師配置基準7対1取得
・内科、外科再編
・女性の働きやすい環境づくり
・各チームのアイデンティティそのもののバッジの紹介
・百日咳集団発生の報告
・大規模防災訓練関連(DMATも)
・患者満足度調査結果
そして人々の往来 等々
いかがです? この多岐に亘るタイトルからして、内容に彩り鮮やかなイメージが浮かんできませんか?どれもこれも、つい先日のことのように思えるのですが。本当に変化の大きい、それだからこそ短くあっという間でした。やはり一年一昔の観ありです。
年々歳々花相似たり、年々歳々人同じからず
迎えたこの一年はどのような彩りと濃さをもった年になるのか。いつも駆け足の高知大学医学部附属病院。「新年度を迎えて」の病院長の言葉にあるように、二年後の開花と結実を目指すために、今年も走りますか。

看護部 弘瀬裕子